



撮影：山田新治郎(表紙、並びに当ページ)

旧登米高等尋常 小学校

宮城県登米市登米町寺池

宮城県登米市の旧登米高等尋常小学校は一八八八(明治二十一)年に建てられた。当時の洋風学校建築を代表する建造物として、一九八一(昭和五十六)年に国の重要文化財に指定されている。

全体は南向きのコの字型で、素木造、寄棟瓦葺き屋根の二階建て。正面玄関とその二階部分は、この建物のシンボルともいえる切妻屋根のバルコニーだ。東西から南に延びる吹抜けの廊下に沿って教室が並ぶ。両翼の先端は「六方」と呼ばれる六角形を半分にした形状の土間になっており、ここが昇降口だ。六方の天井は当時としては珍しい木製トラス構造。建設を担った地元の大工棟梁、佐藤朝吉率いる職人たちも、経験したことのない幾何学的、力学的な洋風建築の構造に触れ、戸惑いを隠せなかったと伝えられる。

設計を手掛けたのは宮城県技師の山添喜三郎。一八七三(明治六)年開催のウィーン万国博覧会で日本館を建設するため、政府の任で大工棟梁として、オーストラリアへ赴いた経歴を持つ才人である。仕事には極めて厳格な人物であった

らしく、屋根瓦は一枚ずつ重さを測り、一晩水に漬けて吸水値を算出、基準に達しなかった瓦はことごとく廃棄した。木材の検品も厳正を極め、資材を納入した瓦職人、木材業者たちが悲鳴を上げた。山添が検査のため屋根に上ったところ、恨みを抱く職人に梯子を外され降りられなくなったこともあったという。そうしたエピソードの数々も山添がこの建物を後世に残そうとした気骨の証左といえる。



洋風建築とはいえ随所に和の面影が感じられ、しゃがみこんで子どもの視線で見上げると威厳と優しさを兼ね備えたこの学び舎の独特な風貌が迫ってくる。1973(昭和48)年まで現役の校舎として供用され、現在は「再現教室」や当時の教科書、教材などを展示する教育資料館として公開されている。